

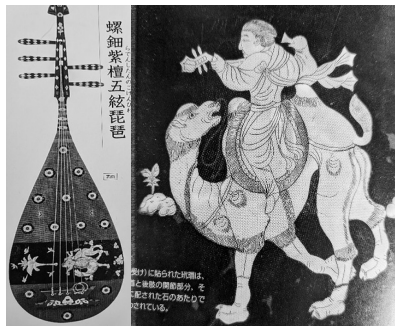
文物が語る音の世界—五絃琵琶—

五絃琵琶

正倉院展には楽器も展示される。展示されれば一番の目玉は五絃琵琶であろう。シルクロードを通じて日本にもたらされた正倉院の御物を象徴する逸品である。林謙三『東アジア楽器考』（カワイ楽譜、1973年、364頁）には、その起源を次のようにいう。

五絃琵琶は、五絃を有する琵琶で、イラン系の四絃琵琶と共に、はるか遠い古代の西アジア地方において、同一源から発した楽器と思われるが、おのおのの分化発展の径路を異にし、結局外形的にも演奏的にも、この二種の系統の琵琶の間に明確な区別点が幾箇か存するのである。即ち四絃琵琶は西アジア、特にイラン地方に生長完成したのに対して、五絃はインド地方に發育大成したもので、このような發育地の相違はやがて、…形態的にもおのおの独自のものを生ずるに至った。

その五絃琵琶について、ここで、『正倉院美術館』（講談社、2009年、136・137頁）によって写真をあげてみたい。



五絃は直頸であり、撥があたる部分には、左の写真にみえるラクダに乗った人物が四絃の曲頸琵琶を奏でている螺鈿細工が施されている。世界にもこれしか残されていない五絃琵琶はどのような音色だったのか。林謙三氏は陽明文庫所蔵の『五絃譜』の解説を試みられた（『雅楽—古楽譜の解説』音楽之友社、1969年）。この五絃の楽譜には、6つの調子と21曲の楽譜が記されていて、渡部信一郎氏によると、そこにみえる「承和九年（842）三月十一日上之」という記述が、日本宮廷に上程された年代ということである（『中国古代の楽制と国家』文理閣、2013年、341頁）。実はこのほとんど同時期に、五絃琵琶の音色を詠じた白居易（772～846）の詩も日本に伝えられた。

白居易「五絃弾」

五絃弾五絃弾	五絃を弾じ 五絃を弾ず
聴者傾耳心寥寥	聴く者 耳を傾け心寥寥
趙壁知君入骨愛	趙壁は君が骨に入りて愛するを知り
五絃一一為君調	五絃一一君が ^{ため} 為に調う

始まりは、五絃の音色に心を奪われている人々が自分の演奏に心底ほれ込んでいることを知る楽人趙壁が、念入りに調弦をしているさまが描かれる。

第一第二絃索索	第一第二の絃は索索
秋風拂松疎韻落	秋風 松を拂うて疎韻落つ
第三第四絃冷冷	第三第四の絃は冷冷
夜鶴憶子籠中鳴	夜鶴 子を憶うて籠中に鳴く
第五絃声最掩抑	第五の絃声 最も掩抑す
隴水凍咽流不得	隴水凍咽して流れ得ず

第1第2の絃の音「索索」は、かさかさとした音で、心の安らかでないさまをも表わしている。秋風に吹かれる松の枝がたてる音を想像すると、なにか心寂しくなる。第3第4の絃の音「冷冷」は、清らかだが冷たいイメージがある音で、籠に閉じ込められ夜に子を案じて鳴く鶴を思わせる。なんと悲痛なことか。さらに第5の絃は最も抑鬱的であり、隴山（陝西省と甘肅省の境にある山）の川が凍ってしまっていて流れずに咽ぶようだという。こうした音のする五絃琵琶に聴きほれていると大変な

ことになる。白居易作品の意図は、五絃の演奏を褒めるところではなく、それに酔いしれる人々に警鐘を鳴らすことであつた。

五絃並奏君試聴	五絃並びに奏す 君試みに聴け
淒淒切切復錚錚	淒淒切切復た錚錚
鉄撃珊瑚一両曲	鉄は珊瑚を撃つ 一両曲
氷写玉盤千万声	氷は玉盤に写す 千万声
鉄声殺 氷声寒	鉄声は殺 氷声は寒
殺声入耳膚血慘	殺声 耳に入りて 膚血惨に
寒氣中人肌骨酸	寒氣 人に ^{あた} りて 肌骨酸なり

さらに5本の絃をすべてつかっての演奏を聴くと、寒く冷やか、さびしくいたましい形容をする「淒淒」、音声のひしひしと迫るさまを表わす「切切」、そして金属性のかたい音の響きを示す「錚錚」、どれも心穏やかにはならないものである。そして、鉄で珊瑚を打ち砕くような曲を1つ、2つ、氷を玉の器に載せる音が千万声と続くのだ。鉄声は「殺」、氷声は「寒」、どちらも決して快いものではなく、「殺声」が耳から入れば皮膚や血脈がいたむし、「寒氣」が人にあたると骨も肉もつらい感じがする。

この詩には、「鄭の雅を奪うを惡むなり」との主題が最初に示されていた。和やかな音色で心に平和をもたらし二十五絃の瑟（雅声）が廃れて、人のところを「殺」「寒」で満たす五絃琵琶（鄭声）が流行する世相を諷刺することにその主眼があつたのである。まさに五絃琵琶崇拜への明快な忠告とも受け取れよう。

五絃琵琶と中国

この五絃琵琶はいつごろから中国で用いられたのか。本学におられた山本忠尚氏によると、北魏太和八年（484）に埋葬された山西省大同市司馬金龍墓の石牀に浅浮彫で表現された伎楽飛天が手弾しているのが最古の例だそう（『日中美術考古学研究』吉川弘文館、2008年、271頁）。五絃琵琶は、北魏の特に漢化政策で知られる孝文帝（471～499在位）の時期に用いられるようになった。宮廷儀礼に用いられる音楽についても、北魏前期は西涼系の音楽の影響が強かったが、孝文帝の改革で、中華の宮廷音楽への転換が模索されていたという（窪添慶文『北魏史』東方書店、2022年、35頁）。異国を象徴するように考えられてきた五絃琵琶も、次第に中華の宮廷音楽へと組み入れられていった。その後『隋書』『音楽志』では、西涼楽・龜茲楽・天竺楽・疏勒楽・安国楽・高麗楽といった外来音楽を宮廷で披露する際に用いられた。ただ、同じように琵琶・笙・笛なども外来音楽を奏でているので、五絃琵琶だけが必ずしも、外来楽器として特別扱いされていたわけではないようだ。それは、先に挙げた日本に伝わる五絃琵琶の楽譜『五絃譜』にみえる曲目に、王昭君や六胡州など辺塞を思わせる曲目だけではなく、聖明楽・秦王破陣楽・天長久など唐代宮廷音楽の中でも皇帝の御代を寿ぐ曲目も含まれていることから明らかであろう。

五絃琵琶が廃れた理由

こうして唐の宮廷で演奏もされ、先に引いた白居易「五絃弾」では、その演奏が長安の人々を魅了したことが克明に記され、日本にも楽譜とともに将来された五絃琵琶がなぜ廃れたのか。村越貴代美氏に「なぜ正倉院宝物『螺鈿紫檀五絃琵琶』に描かれている駱駝に乗っている胡人は四絃琵琶を弾いているのか」（『慶応義塾大学日吉紀要』No.35 2020年）という興味深い論稿がある。その結論は、当時「琵琶」といえば四絃だったからというシンプルなものであるが、五絃は不要となった理由もそこにあるのかもしれない。ただ、白居易の詩が中国と日本で盛んに読まれたことを考えると、「五絃弾」詩が何か影響したと思わずにはいられない。